

秩父三十四観音霊場納経帖

飯能市立博物館 学芸職員 村上 達哉



図1 『秩父三十四
観音霊場納経帖』表紙

秩父三十四観音霊場(以下「秩父札所」と略す)の成立は古く、法性寺(ほうしょうじ 第32 番札所)に残されていた『長享二年秩父観音札所番付』(以下『長享番付』〈ちょうきょうばんづけ〉と略す)の存在から、長享 2(1488)年以前には札所(当時は 33 か所)として成立していたと考えられています。市域に隣接し、江戸時代以降広く世に知られた札所であるため、飯能市域の、特に信仰に関わる歴史への影響を考慮しておく必要があります。

今回は、この納経帖(≒御朱印帳)が有している情報のうち、朱印の分類をしてみます。

34 の朱印は、まず大きく篆書体(てんしよたい)の文字を有するものと、梵字(ぼんじ 一文字の場合は特定の仏を表しています)のものに分けられます。篆書体の文字は「仏法僧宝」とあり、「三宝印」(さんぼういん)と呼ばれる印だと分かります。三宝印は、鎌倉時代から祈禱札・護符などに用いられるようになった、古くからある印です。三宝印はいくつかの形が見られ、円形・正方形(全て、菱型状に斜めに傾けている)・八角形の 3 つに分類可能です。梵字はどうか。梵字は宝珠(ほうじゅ なんでも願ひ事を叶えてくれる宝の珠)

の中にあるもの、焰に包まれた宝珠(火焰宝珠 〈かえんほうじゅ〉)の中にあるもの、円の中にあるものの 3 つに分けられます。

三宝印でも梵字でもない朱印が 1 つあり、秩父札所の公式ホームページ内での説明によると「宝印」と呼ばれています。



図2 三宝印(円形)



図3 三宝印(正方形)



図4 三宝印(八角形)

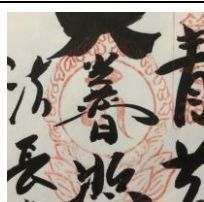


図5 梵字(火焰宝珠)



図6 宝印

三宝印と梵字の割合をみると、あくまで、本資料が作成された昭和 62(1987)年 10 月 7 日から 11 月 9 日までの間の話とはなりますが、三宝印を朱印としている霊場が全体の 82%(28 ケ所)を占め、梵字が 15%(5 ケ所)でした。大勢を占める三宝印は、形で分けるとだいたい円形 57%：正方形 39%の割合です。このように秩父札所で押される朱印は一概ではありません。宗派の違いに起因するのを見たところ、曹洞宗・臨済宗・真言宗などが確認できましたが、特定の宗派が決まった朱印を使用しているわけではないようです。実は朱印はさらに細分が可能です、例えば三宝印では枠線の本数や、正方形のものだと文字の向きで細分できます。文字も基本は篆書体ですが、太さや形が皆それぞれ微妙に異なっています。以上に述べたことから朱印の違いは、それぞれの霊場の独自性、つまり秩父札所の多様性の表れと捉えたいと思います。

【参考文献など】

佐藤久光『秩父札所と巡礼の歴史』岩田書院 平成 21(2009)年 9 月

中村元ほか編著『岩波仏教辞典』平成元(1989)年 12 月/秩父札所公式ホームページ <https://chichibufudasho.com>